

真生

第四卷 十月號

□世には只わけもなく食いさへすればそれでよい着さへすれば
満足だと、唯命をつないでさへ居れば夫れでよいやうな人もあ
る。その見たいと思へば又一方には、甘いものが食いたい、面白いも
の金の為めなら肉慾の満足のみを追ふて行く人もある。云ふ人があるが
と思へば、名譽の爲めなら命もいらぬ財もいらぬと云ふ人も
無いではない。是等のうち愈々云ふ場合、何が一番必要であり
□然らば一番大切であらうか。是等のすべてが皆得られるとしたな
らば、何れに越した喜びはないだらう。
□然らば、此の世の事實は反つて之に反してゐる。そして又そ
れが爲めに、反つて多くは悩んでゐる。
□一體何の爲め金であり、何の爲めの食であり、何の爲めの
名譽であらう。金の名譽の云ふけれども、其の實、それは人生
に意義をなす點に於てのみ其のもの、尊さもあるではないか。
□何事でも、永く慣れば無くてはならぬものであり、止めても
止ぬものなるが故に、我等は之を求むると、云へば云はれない
こともない。
□然らずら、それが眞實の要求であり、本當に無くてはならぬも
のであるか。それは問題である。
□友よ、私共の生存の意義は一体何でありませう。金を貯める
こと、せうか、それとも名譽とか地位とかに戀々たることでありませうか。
□それとも、永遠の生命に生き、無限の向上に目醒めた生活こそ
眞に生く可き人生の意義ではないか。（念）

▽佛を連れ込むのが信仰ではない。
▽佛に婿入りするのが信仰でもない。
▽佛を妾のやうに圍ひ者にして、いゝ時だけ猫撫でにし、都合の悪い時に仕舞込んで我儘勝手をする守本尊ではない、信仰を掲げて狗肉を賣るが爲めの看板の佛でもない、又順調な間だけはれもお慈悲、それも恩寵と貰ひ込んでほく／＼してるが、然し風向きが悪くなると「佛も神も在さぬか」と喚き立てる、そう云ふ古財布のやうな役目をさせるのが佛でも無い。

目次

●宗教と社會主義 古家一男

●眞生同盟の提唱 土屋觀道

●別時三昧會案内

である自分が本物の「自分」になつて本當に暴れぬく、この暴れ方が出来るやうになる、これが信であり、悟であり、佛である。

▽「あばれても浄土へ參るなり」といふ、煩惱菩提が一つになり、自己と佛とが一つになつて本然の自己に崛起せなくては眞の強さは出ぬ。如來を自分から離らかしたり、逃らかしたりする事は出来ぬが、如來の道を塞いだり、如來の息を詰めたりするから、その氣孔を塞がぬやうに専念の努力が要る、それは裡の如來が育たれるに従て内から氣を附けさせる、そして自ら孔を啓いて生れられる、彼此一通一透、滔々として進む域がある。(尅)

宗教と社會主義

古家一男

一、序言

私は次に社會主義と宗教との關係を考究して見たいと思ひますが御存じの通り社會主義にも宗教にも色々な種類がありまして其の總てに對して一々考へを及ぼす事は仲々容易な事ではなく一朝一夕には到底爲し難い事でありましてからこゝには單に其眞髓に觸れるのみに留めて置きたいと思ひます。

宗教と社會主義とは一般に極めて縁遠いもの、様に考へられて居ますが、考へ方によつては其間極めて密接な關係があるのであります。私は皆さんに「社會主義は宗教を度外視しては其の理想とするユートピアの實現が殆んど不可能に近い事並びに新時代の人類の眞の要求に應せんとする力強い宗教は近代思潮の代表的傾向たる社會主義を十

分に理解したものであり其の色彩を多分にとり入れたものでなければならぬ」と云ふ事を了解して戴く迄此話を進めなければなりません。

二、社會主義の意義

宗教と社會主義の關係を述べる前に先社會主義とは如何なるものであるかと云ふ事を明かにして置きませう。社會主義なる言葉は一般に解釋さるゝ所では極めて廣い範圍の新思想を指され甚だ難多にして漠然たる内容を有するものとなつて居りますが、私が今宗教と社會主義との關係を述べるに當つては此非學術的な極めて廣義の社會主義を取り扱ひ其内に包含して居る所の嚴密な意味に於て社會主義に屬せない異分子をも暫く考への中に入れて見たいと思ひます。

社會主義は今述べました如く極めて廣い意味に解されて居りますが、一般に社會主義とせられて

居るもの、目的とする所には次の様な共通點を見出す事が出来ます。第一に消極的には一つは現私有財産制度の破壊であり、他は之に伴ふ資本家階級の撲滅であり、今一つは現資本主義的經濟組織の破壊であります。第二に積極的には労働者を中心とせる新しい經濟組織を組立て、絶對的に平等なる又は由自なる社會を作り上げやうとするにあります。之等の目的は別々の事柄を意味するのではなくて、全然同一の事項であると云ひ得るのであります。蓋し私有財産制を破壊するならば、其必然の結果として、資本家階級が滅亡し、従ひて又現資本主義的經濟組織が崩壊するでありませう。そしてそこに成立する社會が労働者を中心とした社會であるであらう事は疑ふ事ができないからであります。

而して社會主義が其目的を達する爲に採りつゝある手段の主なるものは、次に掲ぐる三者であります。一つはサンシモンやフアビアンソサイテイの如く、専らプロバガンダによらんとする方法であり、二はオウエンやフーリエの如く小規模の

理想郷を建設して模範を示し、漸次に其範圍を擴めて行かうとするものであり、今一つはマルクスやラッサールの如く労働者をして實權の掌握に向つて直進せしめやうとするのであります。最初の事からプロバガンダによらんとするものは純粹な學者的態度をとれるものと云ふ事ができます。京都帝大の河上肇博士の如きは其適例であると思ひます。第二の小規模の模範を示さんとする主義は經濟學上所謂空想的社會主義者の間に色々試みられたものでありまして、歴史上から云ふならば此主義を奉ずる人々の企ては、總て失敗に終りました。武者小路實篤氏等同人の營んで居られる新しい村は勿論單に物質的にのみは解釋し得ない様であります。物質上の組織から云ふならば明かに此主義に屬するものであると思ひます。第三の實權の掌握に向つて直進せんとする主義は、今日最も廣く行はるゝ所である、又現今社會主義者と云はるゝ人の大多數は此部類に屬してをります。此内にも二つの大きな分派があります。其一つはマルクスの流を汲む所謂革命的社會主義であり他は

ラッサール等の主張する議會主義であります。議會主義は其同志より選出した代議士によつて組織せる政黨によつて、議會を通して立法の手段により合法的に其目的を達せんとするものであります。我國に於ても、最近諸外國の先例に倣無產政黨を組織せんとする機運に向ひつゝありますのは、此議會主義的社會主義を奉ずる人の少くない事を示すものであります。革命的社會主義は最も急進的のものであります。直接行動に訴へて實權の掌握に突進せんとするものであります。以上の如く社會主義者が其目的を達せんとする手段には色々あります。そして社會主義者の大部分は社會一般の人々が考へてをる様な危険分子ではなく極めて穩健な思想の持主であります。唯革命的社會主義のみは少々危険な色彩を持つて居ると云ふ事ができるに留まります。

社會主義者は今述べた様な手段によつて、私有財産制を破壊しやうとするのでありますが、然らば財産を何者の所有に歸せしめやうとするか云々方面から社會主義を二つに大別することが出来ま

す。一切の財産を公有に歸せんとするものは共產主義（コンミュニズム）であり、企業用の供せらるゝ財産即生産財のみを社會の有とし、生活財乃至は享樂財の私有を認むるものは經濟學上所謂社會主義者（ソシアリズム）であります。故に嚴密なる意味に於ける社會主義は共產主義を含みません。爾來偉大なる發展を遂げつゝあるかのサンヂカリズムや、ボルシェビズムは共產主義であると同時に、無政府主義（アナキズム）であります。無政府主義は經濟上の主義ではなくて政治上の主義であります。現在一般の人々が社會主義と稱するものゝ内には此ソシアリズムもコンミュニズムもアナキズムも含まれて居る様に思ひます。

三、社會主義の實現難

無政府主義者は同時に共產主義者である場合が多い様であります。之は經濟上の共產主義的思想を政治上に及ぼせば、必然的に無政府主義となるからでありまして、或學者は此主義を一つのものと見て無政府共產主義と稱してゐます。此主義

の信奉者は極端な自由主義者であります。彼等は人類の相互扶助的な共存共保的な先天性存在を信じ、之を彼の間に行はるゝ生存競争よりもより重要視します。そして總ての人類に絶対的な自由活動を認める事が其最も理想的な最も順調な発展を促進する所以であり、自由活動に對する制限は其如何様なるものなるを問はず、悉く人類の理想的なる發達に對する障礙であると主張するのであります。然しながら翻つて考へて見ますと現在の人類の如く其殆んど總てが肉と金と名譽との奴隸であるが如き状態の下に於て彼等の自由活動を許容する時は、果して社會の公安を保ち秩序を維持する事が出来るでございませうか。現在の國家の如く嚴然たる統制者存し、完備せる法規ありて、各人の正當なる活動を強制し居る状態の下に於てすら、罪を犯す人が少くないではありませんか。之は他人の事ではありません、自分自身の赤裸々な心をよく考へて御覽なさい、念佛申さんとする心の間から、虚偽に充ちた罪深い實にあさましくも醜い心が、稍もすれば其頭をもたげやうと

社會主義は、其理想とする社會に於て、絶対的な統制者の存在を認めて居るものであります。故に決して我國體に背馳するものではありません。反つて我帝國皇帝が國家統制上、他國の主權者よりも、より絶対的な權利者なる點に於て、社會主義就中國家を單位として一社會主義社會を建造せんとする國家社會主義は、我國體に最も適當なるものと云ふ事が出来ます。私は前にかのマルクス派社會主義學者として名ある高島素之氏が、皇室中心主義を高唱する、日蓮宗の一派なる田中智學氏の國柱會主義に、非常な共鳴を持つて居られると云ふ事を耳にしました。此事は我國體と社會主義との關係を明かに説明する一例でありまして其處には何等の不思議は無く、寧ろ當然過ぎる程當然な事であると思ひます。思はず脱線しましたが、兎に角勞働の平均と分配の公平とは社會主義の重要視する所でありますが、然らば如何なる方法によつて、勞働を平均し、分配を公平にするかと云ふ問題に立ち至るならば、其甚だ困難なるを發見するでございませう。

して勿論信仰に生きる人は其迷雲を突破して行かうとする心と力とを持つて居ます。然しながら多くの人々は之を打破らうとする心の無いばかりでなく偽惡醜其者の如き自己を初めから悪いとも醜いとも感じない人が少くないのであります。今若し政府を無くし法規を廢して各人の自由活動に放任するならば、社會は果して如何なる状態に陥るでせう。人類の順調なる社會發達どころか、社會の公安や秩序すら完全に保ち得るであらうとは、何うしても考へられませんか。既に斯の如くんば、無政府共產主義者が其理想とするが如き社會が何して實現せしめ得られませう。

無政府共產主義者が自由をモットーとするに對し社會主義者は平等をモットーとして居ります。社會主義は絶対的な平等を得る爲には、自由を放抛します。社會主義的な社會では、絶対的な統制者が社會の名に於て、掌握せる權力によつて、其社會の成員の間に勞働を平均し、分配を公平に行はん事を企圖し、其の成員が之に服従して行く所に、其典型的な形式があるのであります。斯の如

第一勞働を平均すると云つても、如何にするかが平均する事になるでせうか、勞働には頭腦勞働もあり、筋肉勞働もあり、此兩者が種々の割合に組合された勞働もあり、又之等の内にも數限り無き種々な、種類と形式と内容とがあります。又勞働する人には男女の別あり、年寄あり青年あり子供あり強健なるあり、病弱なるあり、其他人格知識技能天分等の點に於ても、人により無限の差異があります。斯の如く條件を異にする人類の上に、斯の如く種多なる勞働を如何に分配する事が平等であるか、如何に割當てる事により人類の平等觀念を満足せしめ得るかと云ふ事は、仲々難しい問題であります。或社會主義者は總ての種類の勞働を、少しづつ時間的に、又は分量的に、社會の全員の間に配分して、割當てる事を主張しました。此企ては假令實現し得るゝものと假定するも、人的條件を看過して居る點に於て、公平とは稱し得ないものであります。又假りに人的條件を考慮し何歳の男子にして、之の健康程度の者は之々の勞働を一日に何時間施、何歳の女子にして

之々の健康程度の者は之々の労働を一日に何時間宛と云ふ風に詳細に決定し、そして其決定が假りに社會の大多數の成員の平等の觀念を満足せしめ得て、彼等が之に服従して行くものとするも——人類が現在と同様に物質に囚はれて居る限り、斯の如き人爲的な労働の割當てが、人類の大多數を満足せしめ得るとは何うしても考へられませんか。即ち其處に社會主義の理想實現上一つの大きな精神上の難關があるのであります。次に今假りに此難關を突破し得たものとして話を進めても——吾々はそこに又極めて難しい問題にぶつつからねばならないのであります。即彼の企てを實現せしむる事は必然的に現産業界より分業を絶滅せしむる事になるのであつて、斯の如き事は人類が原始時代の如き低級にして、單簡なる欲望に歸り得ない限り、又人類の大多數が死亡し終らざる限り、殆んど不可能の事に屬すると思ひます。何となれば現在の生産界に廣く行はれつゝある分業の制度は個人個人の先天的な長所を最もよく利用する事により、労働に關する熟練の知識等を容易く得しむ

る事により、又機械の發明と利用とを便ならしめ大規模の生産組織を誘致したる事によりて、社會の生産力に偉大なる發展を齎せるものであります。が、其分業の制度を廢滅せしむる事は、生産界より機械を奪ひ、大規模の生産組織を破壊する事を意味し、從ひて原始時代の幼稚なる生産組織に逆戻りせざるを者ざる事となるのでありまして、斯の如き經濟の逆戻りは、人類が原始時代の昔に歸り得ない限り、不可能な事であるからであります。蓋しかのマルサスが其有名な人口論に於て、人口は幾何級數的に増加するか、食物は算術級數的に増加するに留る、即食物の増加は人口の増加に伴はないから、其必然の結果として、或年數の後には人類は、其食物の爲に相争ひ相食まざるを得ざる時代を現出するに至るであらうと、論斷しました。然しながら實際上は幸にしてマルサスの言は杞憂に歸しました。それは勿論マルサスの豫測したるが如く、人口が幾何級數的には増加しなかつた事にも因るでありませうが、而し人口は幾何級數的には増加しなかつたけれども、其割合に近

い非常に大なる率を以て増加した事は事實であります。而も人智の發達に伴ひ、人類の欲望は益々多種となり、益々多量となつて來ました。それにも拘らず、此人類に其生存に必要な物質を供給し得たのは、一つに分業の發達による生産力の増加に基くものであると云ふ事が出來ると思ひます。かの十八世紀の後半に於て、完成せられたる産業革命は複雑にして大規模なる産業組織と、精巧なる機械力との利用の結果でありましたが、其事たるや又工場との間に於ける横の分業と、工場内に於ける従の分業との外に、一産業界を範圍とせる大々的分業が從横自在に利用せられたる事に起因するものであると云ふ事が出來ます。而して人類が原始時代の昔に逆戻りする事の不可能なるは、明白なる所でありますが故に、論者の主張するが如く社會の全員の間に諸種の労働を少し宛割當てる事により、此分業を廢滅せしむる事は、現代の産業界より其偉大なる生産力を奪び、引いては人類は餓死する事とならねばなりません。其不可能事たるや云ふ迄ありません。然らば分業

を其儘にして労働を公平に割當てなければならぬ事になります。そして人類の大多數を満足せしめ得る様に労働の理想的な割當は、必ずや種類のにも分量的にも時間的にも、又人的條件の上から見ても、共に此社會の人々の平等の觀念に適合したものでなくてはなりません。此の如きは到底人類の爲し遂げ得る所ではありません。私は物的改造論者たる多くの社會主義から彼等の著述によつて現資本主義的組織の欠陥と、社會主義的組織の長所とを極めて明快に教へられました。而して現社會組織を破壊して、新組織を組立つるに當りて、如何なる手段方法を以て労働を平均せんとするかと言ふ問題に至つては、未だ曾つて一つの満足なる解答をも與へられて居ないのであります。次に労働の結果たる物質の公平なる分配と云ふ方面を考へて見ませう。之又至難事でありませう。社會には數限りない色々の労働があります。が、それ等は直接物資の生産に當るものも、然らざるものも、其殆ど總ては人類の生存上必要なるものであります。少くとも人類發達の過程上、必要なる

ものであると云ふ事も出来ず。之等の無限に異つた種類の労働の間に、生産の結果を如何様なる率に分配する事を平等とするのか。又同じ種類の労働に従事する人々——彼等の各々は其人格智識技能體力等を異にして従ひて其労働並びに其労働の結果たるや、品質的に分量的に無限の差異があるでありませうが、彼等——の間に如何に分配する事が平等なのか。又人類のなかには全く働けない老人子供病人の如きものもあります。又働き得るけれども、將來、よりよく働く爲に、現在は労働せずに智能を練磨する必要ある青少年もありませう。又餘り働けないが營養は澤山攝らなければならぬ柔弱な身體の持主もありませう。其他己むを得ない事情の爲に働きたいけれども、働き得ない人々が少からずあるに相違ありません。彼等は如何なる程度迄分配に預る事を得るのか、之等は仲々難しい問題であると思ひます。物質に囚はれた人類は恐らくは自分自身の割前を他人よりも良く多くしやうとして、互ひに相争ふて止る所を知らない状態に陥でありませう。

次に労働其者の性質上から考へて見ませう、假令社會主義的な又は無政府共產主義的な組織や制度が造り成されたとするも、人類の精神が改造せらるゝ事なく現代と同様であるならば、人々が労働をするのは物質を得んが爲でありませう。彼等の労働は労働それ自身が目的ではなく、目的は労働の外にあります。即肉慾を充し金錢を得名譽を獲得する事が目的であり、労働は此目的を得る爲の手段であります。其必然の結果は目的たる肉や金や名譽の慾を充し得た時は嬉しいでありませうけれども、労働は苦痛其者であらねばなりません。人類の多くは朝起きてから夜寝る迄殆んど總ての時間は労働しなければならぬのであります。其労働が苦痛其者であるが如き人生は實に悲惨であると云はなければなりません。故に多くの人々は労働を以て人生の有害なる犠牲であると考へて居ります。其當然の結果として人々は労働は成るべく之を避け、出来るならば之を他人に轉嫁しやうとし、而して分配は成る可く他人よりも多く得やうとします。こゝに於て彼等の間に、今日と同じ

様に労働の轉嫁争ひと、労働の結果の分配争ひとが續けられるであらう事は明かであります。斯の如く争闘に充ち充ちた上に、労働其者が苦痛の外何者でもない様な、社會が何うして理想的である事が出来ませう。

勿論ミルが云つた様に「民衆の總てが非常に蒙昧であり、其民衆の統制者が此民衆より飛び離れた偉大なる人物であつて、彼が絶對的な權力を以つて、其民衆の間に社會主義を強制的に實行する場合には、其統制者の労働の割當及分配の決定に對し、異議不平を鳴らす者がないでありませうから、社會主義の理想とするが如き社會を、實現せしむる事が或は不可能事ではありまする」けれども、人々の智能に大差なく、各々相當の開發状態にある現在の如き世の中に於ては、其統制者は輿論を無視して、絶對的權力を振ふ事が不可能に近い事でありませうが故に、社會主義の理想實現は到底不可能であると斷言するも過言ではありますまい。

斯の如く觀じ來れば、人類の精神が現在と同様

であるならば、社會の組織や制度を如何に改造するとも、かの社會主義者や共產主義者や無政府主義者が企圖し主張し又は宣傳してゐるが如き、ユートピアは所詮實現せしめ得ないものであると云はなければなりません。

四、社會主義實現の

根本條件としての宗教

今迄述べました様に、物的改造論者たる社會主義者が假りに現在の資本主義的な經濟組織を破壊して、社會主義的な組織を形作り得るとしまして、彼等が考へて居る様なユートピアは到底でき上りさうにありません。然し社會主義者の多くは唯物論者であり、宗教否定論者であるによりても知る事が出来る様に、彼等は現社會の悲惨なる状態の原因は物質的な組織並に制度にあるとし此組織及制度を改造する事が人類を救済する所以であると考へ、専ら現資本主義的經濟組織と社會制度の破壊を企圖しつゝあるのであります。勿論吾々も現社會組織が人類の幸福を増進する上に於て、最も理想的なるものであるとは決して考へて居り

ません。返つて現社會組織が近來人類の理想的なる發達を少なからず防げつゝある事を是認します。然しながら我等は現社會の總ゆる方面に行詰つた醜い姿の原因は、此不完全なる物質的組織及制度よりもより根本的に肉と金と名とに囚はれた人類の精神に存するものである事を信する者であります。即人類を救済するには物質的の改造よりも、精神的の改造がより重要である事を信じます。多くの社會主義者が物質的なる目前的なる改革運動に囚はれ、此精神的根本的の改造を看過したる點に大なる欠陥があり、其事が彼等の理想實現を不可能ならしむるのである事を信じます。

人類が肉と金と名とに囚はれたる世界より脱して、一度靈の世界に更生へるならば、既に組織の改造や社會主義の理想實現は問題にならぬ程容易な業であります。靈の世界に醒むるとは宗教的信仰に生くる事であります。此現實の醜い状態より脱して、自分も他人も共に如來の如き圓滿にして崇高なる人格者となり、永遠に不滅なる宇宙の絶對に歸一せんとするの最高の理想へ向つて、無限

の向上の一路を一意直進する事であります。人々が一旦靈の世界に更生する時、彼は最高理想への無限の向上を口指して、奮進する事に全生命を捧げずには居れなくなります。彼等が念佛を申すのは基より朝起きるのも夜眠るのも御飯を載くのも本を讀むのも働くのも遊ぶのも彼の生活の總ては醜い我より如來たるの我に向上せんとする、又醜い他人をも等しく如來たらしめ此現世其儘を極樂淨土たらしめんとするの過程たる歩みであり、祈りであります。彼等には此道を歩むに必要な最少限度の物質の外何物も要りません。それ以上は彼等の敢て必要とせざる所であります。かゝる社會には既に分配争か起りそうな筈がありません。尤も個人個人の必要とする最少限度の物質は其人的事情の異なるに伴ひ、種類のにも分量的にも品質的にも少からぬ差異があるであります。或人は多くを消費せなければなりませんまいし、他の人は少くしか要らないであります。然しながら此個人個人の消費が差ふ所に本當の平等があるのであります。種類の量的に質的に全然同様な

分配をなす事が平等であると考へる人があるならば、それは大きな誤りであります。こゝに一つの梨があるとします。そして母と幼兒の二人が此梨を分ける時に、其梨を眞二つに兩片が寸分異はない様に切り母子が其一片づゝをとつたとします。然らば幼兒は恐くは其半分を食へ盡し得ないであらうし、母は半分では足りないであります。此の如き分配が平等であるとは、何うしても考へられません。假令其求むる所が多くとも、それが眞善美への生活に必要なものならば、宜敷與へらるべきであり、假令其求むる所少量なりとも、眞善美への生活に必要なならざるものであるならば、決して與へらるべきではありません。前述の如く靈に惺めた人々は無限の向上に専念せるものでありますから、彼等は初めから其爲に必要とする程度以上の物質を食へないに違ありません。少くとも食へない様に努めるに違ありません。既に斯の如くんば假令彼等の自由意思に放任するとも其處には何等の困難もなく、極めて自然的に眞の必要に應じたる理想的な分配が行はれるであらう事を

信じます。其處に眞の平等があるのであります。かゝる社會に於てこそ、初めて社會主も共產主義も無政府主義も其理想通りに實行し得られるのであります。靈に惺めたる人類の勞働は、最早肉や金や名の爲の手段ではありません。勞働それ自身の内に目的があります。勞働は決して人生の有害なる犠牲ではありません。勞働する事それ自身が向上への歩みであり、祈りであります。故に彼等は勞働を爲す刹那刹那に於て、望みと喜びと感謝の念に充たれる事を得るであります。そして其勞働が困難なものであればある程、より大なる恩寵に恵まれつゝ、之が成就に力を注ぐ事が出来るであります。斯の如き世界では、人々は出來得る限り働かうとします。許されるならば、他の人々の仕事迄も喜んで手傳はうとします。かゝる世界には最早勞働の轉稼争がありそうな筈がありません。斯くして人々は望みと喜びと感謝に充たされつゝ宇宙の大道を直進します。彼等は彼等の前途に横る事あるであらう所の、如何なる障礙をも突破して

直進し得る確固たる信念を握つて居ります。彼等の前途には、彼等の向上を阻む何等の障礙もありません。彼等は其處に絶對的な自由の境地を恵まれて居るのであります。世の中には自由を誤解して、何等の規律なき放縱なる生活を以て自由なりと考へて居る人が少くない様でありますが、之は大きな間違であつて、此の如きは眞の自由ではありません。斯の如き自由は少々の障礙に出會ふならば忽ち壞れてしまひます。眞の自由は其様に根底のないものではありまん。眞の自由は如何なる障害にも、壞れざるものでなければなりません。かゝる自由は確固たる信仰を握つた人に於てのみ得らるゝものであります。又彼等は等しく無限の向上に一意専心なるものでありますから、敢て他よりの強制や統制がなくとも、同じ道を同じ方向へ相助け相勵んで進んで行くに違ひありません。かゝる社會に於てこそ、初めて政府が無くとも法規がなくとも、人類の理想的なる發達を遂げ得られるのであります。即かゝる社會に於てこそ無政府主義者が理想とするが如き社會を實現し得

られるのであります。又假令政府があり法規が存在し、絶對的な統制者があるにしましても、爲政者も立法者も人民も共に同じ道を同じ方向へ進むものであります以上、其政治や法規が宇宙の法則に反し、理想的な向上を防げる様な事がありません。蓋し必要以上は最高理想への歩みに必要なる最少限度を意味するのであります。即眞實の生活に必要であると云ふ意味で、單に肉や金や名の慾を充足する爲に必要なるものを意味しません。此の如き意味に於て眞實に必要とする程度以上に所有すると云ふ事は、——とりもなほさず

當然他人に屬すべきものを、占領する事となるのであります。其事は當然所有すべくして所有せざる人の向上を防ぐる事となり、必要以上に所有することそれ自身が罪惡であるのみならず、必要以上の所有は必要以上の消費を生む事となり易く、之又罪惡でありますから、靈に惺めたる人々は必ずや眞實に必要とする程度以上に貪らないのみならず、必要以上に所有するに至つた人々は喜んで足らざる人に分け與へ、彼等の向上に資するであります。然らば此社會に於ては既に有産者（ブルジョア）と無産者（プロレタリア）との區別がなくなり、從ひて資本家と勞働者との階級的對立が消滅し、現經濟組織が崩壊して新しい社會組織が出来上るであります。そして其新しい組織は恐らくは社會主義的な、又無政府共產主義的なものであらう事を信じます。斯の如く人類が一度靈性に更生へるならば、社會主義や共產主義や無政府主義の理想とするが如き社會が、自然的に何等の無理もなく何等の争闘もなく、殫の犠牲も拂はるゝ事なくして、極めて易々と立派に成立するのであ

らう事を信じます。

私は先に心的改造を度外覺したる社會主義は其理想實現が不可能に近いと云ふ結論を得ました。而して今宗教によりて人類を心的に救済するならば極めて易々と社會主義の理想を實現し得らるゝであらう事を述べました。そして又吾々は宗教以外の手段を以てしては如何にするも社會主義の理想實現を可能ならしむるが如き徹底的なる人類の心的改造を爲し遂げ得ない事を信じますが故に、私は宗教は社會主義の理想實現の根本的要件なりと斷言して憚らない者であります。

五、新時代の宗教と社會主義的思潮

次に宗教の側より、新時代の宗教は何が故に、社會主義的色彩を持つたものでなければならぬかと云ふ事を考へて見ませう。宗教は彼我共に實現より最高理想へ向つて無限に向上せんとするの教へでありますから、決して此現實を無視する事が出来ません。而して今や現資本主義的經濟組織が其圓熟期に達して、社會主義的な思想が年と共に非常な勢力を以て擴がりつゝあります。そして

將來に於ても又同様に益々加速度を以て彌漫して行くであらう事を信じます。然らば社會主義的思想が假令善いものとするも、悪いものとするも、此新時代の陣頭に立つて活躍せんとする青年に理想を示し、其活動に根底を與へ、彼等を眞善美の世界へ導かんとする力強き宗教は決して社會主義を無視する事が出来ません。

マルクスが云つた様に、社會組織は社會の生産力——此生産力の發達は人類の發達と人口の増加とに比例するものでありますから——從つて人類の進歩との間には密接な關係がありまして、人類の智識が或程度以上に發達すれば、社會組織も又それに伴ふて變動するものであります。一定の開發程度の人類の社會には或一定の社會組織が他のものに比し最も適當であり、其組織を採る事が其社會の生産力の發達上、人類の發達上最も便利なるものであるのみならず、其發達を少からず助長するものであります。人類がそれ以上或程度迄發達する時には、最早其組織が不適當となり、其組織を維持する事は生産力を萎縮せしめ、人類の

發達を束縛するに至るものであります。そして生産力の發達や人類の進歩が斯の如く社會組織の爲に束縛せらるゝ事となれば、社會組織が必然的に改造せらるゝに至るものであります。過去に於て既に人類の開發に伴ふて社會の組織は幾つかの進化の階段を経て來ました。即階級の存せなかつた原始時代の組織から、奴隸制度の時代となり、又或地方では更に農奴制度の時代となり、封建的な社會組織を経て遂に現在の資本主義的な賃傭労働の社會組織を現出するに至つたのであります。過去に於て斯の如く變遷し來つた社會組織が將來變化しないであらうとは決して考へられません。而して現組織は既に人類の進歩を束縛しつゝあると見る事が出來ます、少くとも此狀態に近き所にあると云ふ事が出來ると思ひます、現資本主義的組織は初めから個人主義を根底としたものでありまして其少數者の資本の獨占、其無産者に對する奴隸的労働の經濟的強制、並びに其労働の不公平及其分配の不公平等は最早現在の如く發達せる人類の正義の觀念に反するに至つたのみならず、人

類の全般的向上を阻害するが如き狀態に陥つて來ました。労働者は最早頑迷なる資本家の贖使の下に奴隸的な労働をなす事を潔しとせない様になりました。無産者は彼等が終日激しい労働に従事しても、一家の糊口をすら潤ふ事に十分でないにも拘らず、毎日遊んで贅澤をして居る多くの人を見て、斯の如き不合理を認めつゝある現組織や、制度に非常な疑ひと不満とを感じる様になりました。彼等が其日の食ふにも困り着る衣服すら充分でないにも拘らず、一方では生産過多とか生産制限とか云ふ聲を耳にする事が度々ありました。彼等の仲間には働きたくて働きたくてしやうないにも拘らず、働く場所がなく路頭に迷ふて居る幾多の人がある事を知つて居ます。其他現社會組織の藏する幾多の欠陥と、不合理とは常に彼等を虚けて來ました。彼等が幾等汗水をたらして働いても、其労働の結果たる生産物の大部分を資本家に搾取されるのである事に考へ至る時、彼等はハンマーを握る手も自づと弛まざるを得ませんでした。皆さん、労働者が仕事に精を出さないのが無

理だと思ひますが、労働者が怠けざるを得ない様に仕組んである組織が不合理だとは思ひませんか。労働者は怠けられるだけ怠ける様になりました。而して分配は成る可く多く得んが爲に労働は成るべく自由に成るべく樂に成るべく短くする様に努力し出しました。其努力が團体的運動となつて表れて來たのが所謂労働運動であります。そして社會主義的な思想が、益々盛となるにつれて労働運動も又益々熾烈となり行くであらう事は疑ふ事が出來ません。一般労働者の間に怠けられるだけ怠けてやれと云ふ心理が彌漫して來た事と、労働運動の目的達成上の二手段たるサボタージュストライキ等の直接行動が、現社會組織の生産力を少からず減少せしめつゝある事は明かなる事實であります。斯の如き情氣、生産力の減退、階級闘争、曰く分配争、曰く労働の轉稼争、曰く不景氣曰く誠首、曰く生活難、何と云ふ醜い狀態に充ち満ちた悲惨なる姿でせう。斯の如き慘狀は現組織が既に生産力並びに人類の發達を束縛しつゝあるものである事を證明するに十分ではありまする

か斯の如く觀じ來らば一般民衆の意思に反して迄も如此不完全なる現在の組織を維持せんとする個人主義的資本家的思想は甚だ危殆なるものと云はなければなりません。返つて人類全般の幸福をモットーとして成れる社會主義的な思想をとり入れて、現代思潮の流れに隨順して行く事がより機健にして吾々の探るべき本當の態度ではありませんか。

宗教が決して現實を無視すべからざるものであるが上に、既に現代が斯の如き状態にある以上、此穢土を化して淨土となさんとする眞實の宗教は到底近代思潮の代表的傾向たる社會主義を無視する事が出来ません。否現代の總ゆる方面に行詰つた社會を改善し、人類を救済すべき眞實にして偉大なる宗教は、將に此社會主義的色彩を多分にとり入れたものでなくてはならない事を信じます。土屋上人が八月號の眞生に時代思潮の變遷と宗教の進化との關係を述べられた後に「……いはゞ今後の宗教は來るべき人類の生活に向つて、正しく眞人の自由を與へる愛の宗教でなくてはならない

從つてかゝる今後の宗教は今少しく社會主義的傾向を多分に抱含し得た慈愛の宗教でなければならぬ。即最高理想を最も容易に誰にでも行けると云ふものでなくてはならない……」と説いて居られますのは實に至言であると言はぬばなりません。

六、物的改造と心的改造

私は既に「宗教と社會主義」なる題の下に申し上げたいと考へて居ました事は總て述べ盡しました。それで今は筆を擱くべき時であります。然しながら皆さんの誤解を招かない様に、私の物的改造に對する態度に就いて今少しく附加へて置きたいと思ひます。

私が前から述べました所により御了解の事と思ひますが、社會主義と云ひ共產主義と云ひ物質的の改造は決して根本的ではありません。之は吾々の目的でもなく理想でもありません。目的理想は實に人類を精神的に改造するにあるのであります。宗教によつて人類を救済するにあるのであります。肉に囚はれた金に囚はれた名に囚はれた人類の精神を改造して、靈に醒めしむるにあるので

あります。物的に改造を便ならしめ、可能ならしめ、普遍ならしむる手段であり、方便であるに過ぎないのであります。故に物的改造は心的改造に役立ち得る時に於てのみ、其價值を認め得るのであり、之に役立たない場合は害ありとも益なきものである事を信じます。此點が吾々の一般の社會主義者や共產主義者と全然態度を異にする所であります。

吾々は我々の宗教に假令社會主義的な又は共產主義的な色彩を採り入れるにしても、吾々は決して社會主義者でも共產主義者でもありません。吾々は飽迄も人的を心的に改造する事によつて、彼

眞生同盟の提唱 土屋 觀道

昨今の私は念佛ばかりではゐられなくなりまして。そして今や山には入つて靜に念佛するよりも寧ろ山から出で、社會改造に全身を献げたい心であります。何となれば眞の念佛の生活はたゞいつまでも如來に合掌するばかりが目的にあらずして寧ろ此の合掌したる心の世界から眞實社會の改善

我と共に永遠に不滅なる宇宙の絶對たる如來に歸一せん事を最高の理想として、之が達成に身と心との總べてを捧げつゝある眞面目なる求道者であります。眞摯なる佛子であります。

兄弟よ、吾々は世人の多くが事の眞相を捉ふる事なくして、善惡の言を爲す事の大なる誤なるを諒さなければならぬ。彼等に眞實の如何なるべきやを教へなければならぬ、そして願くは總べての人々と互ひに手を取り合つて、靈の眼を大きく見開き、大宇宙の眞相を靜觀しつつ、永遠に不滅なる宇宙絶對への無限向上の一路を一意に奮進しやうではありませんか。

へと生くる所が眞の目的であるからであります。友よ、願くば吾々お互は單なる念佛の道友たるに止まらず、更に一步を進めて共に社會改造への生活へと立たうではありませんか。

私は之から諸君と共にあらゆる社會の問題を念佛を中心としたる立場に於て改造の第一歩に立ちたいと思ふ。願くは進んで眞生同盟の結を創らうではありませんか。(一〇、一一)

秋季特別修養念佛三昧

修養に最も適した秋の時候になりました、就きましては、今回國寶大佛と静寂を以て知られた、河内國得生寺を三昧道場に選びまして、左記制規の下に最も如法に別時を修すること致しました、どうか入信者は素より未入信のお方は此の機會を取り失はない様には是非繰合せて御参加下さる様御案内申上げます

△日時 自十月三十一日 七日間
至十一月六日

△道場 南河内郡石川村大字大ヶ塚 絶景の地

得生寺 (國寶大佛前に於て勤修)

△講師 土屋觀道上人

△順路 大阪鐵道阿部野橋終點乗車、太子口岸驛下車、約四十丁(但し富田林驛よりは人力の便あり)

△申込 來十月廿五日迄大阪光明會事務所宛

△會費 實費 (一日約壹圓)

注意 泊り込み御参加の方はなるべく前日夕刻迄に御登山のこと、泊り込みの方は是非毛布を御持参願ひたし、前日午後三時迄に阿部野橋終點へ御集合の方は委員附添ひ道場へ御案内致します手荷物など共に車で運びます右精々御誘合され御参加御勤修被下度此段御案内申上候

大阪市天王寺區生玉町大寶寺内

大正十四年十月

大阪光明會

念佛は惱めるもの、平安となり、疲れたるものの休むところであり、又すべての人々の眞に生くべき活動の源泉であります。願くは此の期を逸せず眞に心を慰め、眞に生きやうとする人々の心からなる集りを祈るものであります。

眞生社同人

定価 一部十錢 半年六十錢 一年一圓
振替口座東京四七二八八番 眞生社

東京市芝區芝公園第十四號地九番

編輯兼 土屋觀道

發行所 眞生社

東京市芝區芝公園第十四號地三號

印刷人 三井清次

印刷所 玄々堂印刷所